

フランス語の再帰構文と日本語の自発表現

井口容子

1. はじめに

フランス語学では「再帰代名詞 *se* + 動詞」の連鎖を「代名動詞」と呼んでいる。ドイツ語やスペイン語など、他の多くの言語における再帰構文がそうであるように、フランス語の代名動詞も再帰の意味を表わすだけでなく、「中間構文 (middle construction)」とよばれる用法 (ex. *Ce livre se lit facilement*) や、他動詞とベアをなす自動詞にあたる用法 (ex. *Le verre s'est cassé*) を持つ。Ruwet(1972)はこの二つの用法を、それぞれ「中動的代名動詞 (moyen)」、「中立的代名動詞 (neutre)」と呼ぶ。

ところで日本語においても、「受動、自発、可能」などの機能が同じ形態素によって表現されるという現象がみられる。この日本語の現象と、フランス語等の再帰構文のそれとは、同じファクターによって説明されるものだとする立場が近年よくみられる (ex. Shibatani 1985, 東郷 1994)。

本稿においてはこのようなことをふまえた上で、フランス語の代名動詞と日本語の自発の表現を対照させながら分析してみたい。出発点としてフランス語学において「中動的代名動詞のアスペクト制約違反」と呼ばれる現象について考察する。分析のキーワードとなるのは「語彙的アスペクト」の概念である。

2. 中動的代名動詞のアスペクト制約

中動的代名動詞には、時間軸上の特定の一点に位置付けられる出来事は

表わすことができないという、アスペクト上の制約が課せられているということがよく知られている。

(1) a. *Le caviar se mange avec de la vodka.* (Ruwet 1972)

b. **Le caviar s'est mangé.*

しかしながらフランス語の中動的代名動詞には、このアスペクト制約に反すると思われる例が少なからず存在する。

(2) *Le ronronnement feutré du moteur s'entendit dans toute la ville.* (Pinchon 1986, 出典は M. Duras, *Moderato Cantabile*)

(3) *Ce livre s'est imprimé en une semaine.* (Zribi-Hertz 1982)

(4) *La question s'est discutée hier matin avec passion dans la salle du conseil.* (Boons, Guillet & Leclère 1976)

この問題は研究者達の注目を集めており、中でも春木 (1987, 1994) においては、興味深い分析がなされている。ただこの問題に関する従来の分析は、(2)–(4)のような例に対して特に区別を設けることなく、一括して説明を行なっている、という印象を受ける。だがアスペクト制約違反といわれる文の例をよく検討してみると、かなり性格の異なるいくつかのグループに下位区分されるのではないかと思われるのである。

本稿で特に注目するのは、(2)–(3)のタイプである。これらは中動的代名動詞というより、むしろ中立的代名動詞の拡大用法であると考えられる。そしてこの拡大用法がまた二つのサブクラスに分けられる。これを *achievement* 型、*accomplishment* 型と呼ぶことにするが、(2)–(3)はそれぞれのクラスの代表例である。

(4) はこれらとはかなり性格の違うものである。Boons, Guillet & Leclère(1976) は非具体的意味を持つ動詞の場合にはアスペクト制約の対象とならないことが多いということを指摘しているが、(4) はその例である。これはフランス語の中動的代名動詞のひとつの興味深い特性を表わすものであると思われるが、今回は「中立的代名動詞の拡大」という問題の方にテーマを絞っているため、この問題はまた別の機会に論じたい。

3. プロトタイプ的中立的代名動詞の二つの特性

ここで *se briser, s'allumer* などのプロトタイプ的な中立的代名動詞の特性について考えてみたい。Grimshaw (1982) も指摘するように、このタイプの代名動詞は対応する他動詞との間に、いわゆる“causative-inchoative”の関係をもつ。他動詞—自動詞の間の意味的・論理的な対応関係として諸言語において広くみとめられるこのパターンは、(5) のような形で表わすことができる。

(5) a. causative predicate

CAUSE(x, BECOME(Predicate(y)))

b. inchoative predicate

BECOME(Predicate(y))¹⁾

たとえば *briser-se briser* の論理的構造は、次のように記述されることになる。

(6) a. *briser*

CAUSE(x, BECOME(BRISÉ(y)))

b. *se briser*

BECOME(BRISÉ(y))

(5b)の構造をみると、中立的代名動詞は“BECOME”という semantic primitive によって特徴付けられることがわかる。つまり中立的代名動詞が記述する出来事(event)は、「(Predicate(y)で表わされる)最終状態への移行」を表わすものであるということが出来る。この特性は中立的代名動詞のような inchoative predicate と、*marcher* のようなタイプの自動詞との間の相違を示すものともいえる。*marcher* 等はいわゆる「未完了動詞」であり、「最終状態」を持つものではない²⁾。

(5)の構造は、さらに次のようなことを示す。inchoative predicate は、対応する causative predicate から、起因者“x”を semantic primitive の“CAUSE”とともに取り除いたものであるといえる。逆にいえば、起因者“x”を取り除くことが可能な他動詞のみが、対応する inchoative

predicate を持ち得る、ということになる。たとえば *assassiner* は、(5a) のような形で記述することの可能な、状態変化を含意する他動詞である。だがこの他動詞から (7) のような中立的代名動詞を派生することはできない。

(7) **Le président s'est assassiné.*

assassiner という動詞が記述する出来事は、自然発生的に起こり得るものではない。起因者を取り除くことのできない概念なのである。

以上のことをまとめると、プロトタイプ的な中立的代名動詞は次の二つの特性をもつ、ということになる。第一に、「ある最終状態にむかう変化」を記述するものである。このことは語彙的アスペクトとしては「完了的」である、ということも含意する。第二に自然発生的な意味をもつ。したがって *assassiner* のような自然発生的な生起が不可能な概念を表わす動詞は、中立的代名動詞を形成することができない。この二つは、単にフランス語の中立的代名動詞の特性というにとどまらず、より一般的に *inchoative predicate* の特性といえる³⁾。

4. 中立的用法の拡大例〈1〉——achievement 型——

4.1. 知覚動詞

中動的代名動詞に課せられるアスペクト制約に違反する例として、知覚動詞である *s'entendre, se voir* を含む文がしばしば指摘される。(2) もそのひとつであるが、その他に次のような例もある。

(8) *Cela ne s'est jamais vu.* (春木 1987)

(9) は作例であるが、インフォーマントは問題なく許容する。

(9) *Ce bruit s'est entendu de loin.*

se voir や *s'entendre* を含む文においては、対応する他動詞の主語にあたる人物が潜在的に存在することが想定されている。「見る人」、「聞く人」が存在せずして、「見える」、「聞こえる」という event は成立し得ない。この点において *se voir, s'entendre* は、*se briser, s'allumer* といったプロトタイプ的な中立的代名動詞と異なる。そしてこの特性を持つため、この

二つはしばしば「中動的代名動詞」とみなされてきたのである。

voir, entendre はアスペクト的には *achievement* である、ということが出来る。Vendler (1957) は、英語の *see* に関して、(10) のような場合には *achievement* である、と指摘している。

(10) At that moment I *saw* him.

(Vendler 1957: 154)

Van Valin (1990) は *achievement* の「論理構造 (LS: Logical Structure)」を (11) のような形で記述する。

(11) BECOME predicate'(x) or (x,y)

(Van Valin 1990: 224)

この「論理構造」が“BECOME”という operator を含んでいるということにもあらわれているように、*achievement* は「最終状態への移行」の概念を含むものである。*voir, entendre* も、映像／音が目／耳に到達する、という意味において、「最終状態への移行」という性格をもつ。そしてこの event は知覚者の意図をはなれて「自然発生的」に起こり得るものである。目を開けている限り映像は自然に目にとびこんでくるし、意図的に耳をふさがない限り、音が耳にはいつてくるのを止めることはできない。

briser や *allumer* のような“causative predicate”と呼ばれる他動詞の場合は、その主語が「起因者」であるために、この人物の存在を想定したままでは自然発生的な意味は得られない。したがってこれらの動詞が「自発的」という意味特性を獲得するためには、一項述語である *inchoative predicate* にならねばならない (本稿3節を参照されたい)。

これに対して *voir, entendre* という知覚動詞は“causative predicate”ではない。これらの主語は「起因者」ではなく、映像や音が到達する「到達点」にすぎない。したがってこの人物の存在を想定しながら、自然発生的な解釈を得ることが可能である。こうして *se voir, s'entendre* という、二項述語でありながら「自発的」という意味特性をもつ形式が可能となる。

se voir, s'entendre は、対応する他動詞との間に“causative-inchoative”

の関係をもつものではない。しかしながら「最終状態への移行」と「自発的」という、*inchoative predicate* にみられる二つの重要な意味特性を有している。これらは中立的代名動詞の拡大例というべきものである⁴⁾。

4.2. 認知動詞

comprendre, apprendre, concevoir, reconnaître など、「認知」を中心とした精神活動にかかわる意味内容をもつ一連の動詞の代名動詞形も、知覚動詞の代名動詞と同様に、中立的代名動詞の拡大例と考えることはできないだろうか。これらの動詞はいずれもアスペクト的には *achievement* であり、「最終状態への移行」という概念を含む。そしてこれらは自然発生的な解釈が可能である。これらの動詞は知覚動詞と同様の意味的特性をもっているのである。

春木 (1994) は次の文の *s'apprend* について、「知らないうちに身につくものだ」という解釈を受ける場合には中立的代名動詞である、という見解を示している。

(12) *Savoir vivre? Ça s'apprend petit à petit sans le savoir en voyageant.* (春木 1994:40)

ただ認知動詞の代名動詞は、複合過去におかれた場合の許容度が、知覚動詞の代名動詞の場合ほど高くない、ということが指摘できる。(13)–(14)は作例をインフォーマントに示したものである。

(13) *?Cette théorie *s'est comprise* tout de suite.

(14) ?Ce plan *s'est conçu* pendant son voyage en Italie.

これらの例はいずれもある程度の評価は得ているものの、容認可能性はそれほど高くない。知覚動詞の例である(8), (9)が全く問題なく受け入れられているのと比べると、明らかに許容度に差がある。この点を考えると、認知動詞の場合は拡大中立的代名動詞とみなすのが妥当かどうか疑問に思われてくる。

しかしながら他方において、*se comprendre, se reconnaître* などを中動

的代名動詞とみなすことに関しても問題がある。Fagan (1992) は英語やドイツ語の中間構文 (middle construction) を許容する他動詞は、フランス語の中間構文 (中動的代名動詞) の場合とは異なり、アスペクト的に activity と accomplishment のみに限定され、achievement は許容しないということを指摘している。

(15) a. *A red-winged blackbird recognizes easily. (Fagan 1992)

b. *This poem understands easily. (Ibid.)

c. *The dirtiness of the New York streets notices easily.
(Fellbaum & Zribi-Hertz 1989)

(16) a. *Diese Krankheit erkennt sich nicht leicht. (Fagan 1992)

'This disease doesn't recognize easily.'

b. *Deine Unsicherheit bemerkt sich unschwer. (Wagner 1977)
'Your uncertainty notices easily.'⁵⁾

(15), (16) は英語、ドイツ語のそれぞれの例である。アスペクト的に achievement である認知動詞を含むこれらの文は、いずれも許容されない。これに対してフランス語の (17a-c) は、全く問題なく許容される。

(17) a. Pierre se reconnaît à son nez rouge. (Zribi-Hertz 1982)

b. Ce poème se comprend facilement. (Fagan 1992)

c. La saleté des rues de New York se remarque facilement.
(Fellbaum & Zribi-Hertz 1989)

知覚動詞の場合にも同様の現象がみとめられる。

(18) a. [仏] La Tour Eiffel se voit de loin. (Zribi-Hertz 1982)

b. [独]*Der Eiffelturm sieht sich von weitem. (Fagan 1992)

c. [英]*The Eiffel Tower sees from afar. (Ibid.)

本稿4.1.節において示した分析に従えば、知覚動詞の代名動詞形 *se voir* の例である (18a) は、「中動的代名動詞」ではなく、「拡大中立的代名動詞」として許容される、と考えることができる。認知動詞の場合も、(17a-c) のような例を「中動的代名動詞」ではなく「拡大中立的代名動

詞」とみなせば、中間構文を許容する他動詞は *activity* と *accomplishment* のみである、という一般的な傾向はフランス語においてもみとめられるということになる。

いずれにしても、認知動詞の代名動詞はさまざまな問題を含むものであると考えられる。(17a-c) のような例を、中動的代名動詞とみなすのか、それとも拡大中立的代名動詞とみなすのかという問題は、今後の課題としたい。

この節を終えるにあたり、認知動詞に関して、もうひとつ興味深い現象をあげておきたい。

(19) *La nouvelle s'est sue tout de suite.*

(『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社)

achievement の意味をもつ場合の *savoir* を用いたこの例は、(13)–(14)とは異なり、全く問題なく許容される。この例は8節において述べる日本語の「知れる」との関係においても興味深いものである。

5. 中立的用法の拡大例〈2〉——*accomplishment* 型——

(20) *Ce livre s'est imprimé en une semaine.* (=3)

(Zribi-Hertz 1982)

この文の許容度が高いのは *en une semaine* という前置詞句の存在によるものと思われる。「en + 時間 (または期間)」の付加が、複合過去におかれた代名動詞の許容度を向上させる現象は、他の動詞においても認められる。(21)–(23) は作例をインフォーマントに示したものである。

(21) a. **Tout le vin de la cave s'est bu.*

b. ?*Tout le vin de la cave s'est bu en un mois.*

(22) a. **Tous les plats se sont mangés.*

b. ?*Tous les plats se sont mangés en une heure.*

(23) a. **Tout le linge s'est lavé.*

b. ?*Tout le linge s'est lavé en une heure.*

筆者はこれらの例にみられる代名動詞は、中動的代名動詞ではなく、中立的代名動詞の拡大用法であると考え。ただ4節でみた *s'entendre, se concevoir* などの拡大例とはかなり性質の異なるものである。4節で扱った例はいずれも心的・精神的なプロセスを表わす代名動詞の例であったが、*imprimer, manger, boire, laver* などはいずれも具体的な行為を表わす動詞である。語彙的アスペクトの観点からいえば、4節でみた *entendre, concevoir* 等はいずれも achievement であるが、本節で扱う *manger, laver* 等はいずれも accomplishment である。Dowty (1979)/Van Valin (1990) は accomplishment は activity と achievement の二つの部分から成るものとしてとらえる。accomplishment の「論理構造 (LS: Logical Structure)」は次のような形で表わされる。

(24) ϕ cause ψ , where ϕ is normally an activity predicate and ψ an achievement predicate.

(Van Valin 1990: 224)

ところで *se briser, s'allumer* 等のプロトタイプ的中立的代名動詞に対応する他動詞 *briser, allumer* も、アスペクト的には accomplishment である。しかしながらこれらの他動詞と *manger, boire* 等との間には大きな違いがある。前者は本質的に accomplishment の意味を持つものであるのに対して、後者は派生的に accomplishment の意味を持つものであるといえる。Van Valin (1990) は英語の *eat* に関して、*John ate spaghetti* という文においては activity であるが、*John ate the spaghetti* においては accomplishment である、と指摘する。そしてこの二つの用法の間には、(25) の語彙規則で表わされる派生関係がある、としている。

(25) Activity [motion, creation, consumption] → Accomplishment:
given an activity LS [ϕ …predicate'…], add CAUSE [ψ BECOME predicate'…] to form a ϕ CAUSE ψ accomplishment LS.

(Van Valin 1990: 225)

フランス語の *manger, boire* も、*eat* と同じタイプの派生的 accomplishment-

ment であるといえる。*laver* は motion, creation, consumption のいずれに該当するものでもないが、(26)が示すように activity, accomplishment の二つの用法をもつ。

(26) a. Elle a lavé du linge pendant une heure. (activity)

b. Elle a lavé sa chemise en deux minutes. (accomplishment)

laver に関しても、基本的意味は activity であり、派生的に accomplishment の意味を持ち得るといことができる。

Van Valin (1990) は、これら派生的 accomplishment においては、その意味内容のうち、第一義的なものは causing activity の方であり、「結果」として引き起こされる「状態」ではない、と指摘する (p. 225)。これに対して本質的 accomplishment の場合は、むしろ「結果としての状態」の方に意味内容の重点があるように思われる。このことは、本質的 accomplishment である英語の他動詞 *break* を含む *The child broke the watch* という文の「論理構造」を、Van Valin(1990) が (27) のような形で記述していることからもうかがえる。

(27) [do'(child)]CAUSE[BECOME broken'(watch)]

(Van Valin 1990: 224)

(27) において、causing activity にあたる部分は [do'(child)] である。この “do'” というのは causing activity の意味内容が特定されていない場合に用いられるものである。つまり *break* という他動詞において、動作主は何らかの行為を行なうのであるが、その「行為」の内容はとくに限定されていない。結果として時計がこわれた状態に至らしめれば *break* という event は成立する。

フランス語のプロトタイプ的中立的代名動詞に対応する他動詞は、「結果としての状態変化」に意味的重点がおかれる本質的 accomplishment である。これに対して *manger* や *laver* などは activity の方に重点のある派生的 accomplishment である。これらの動詞から、activity をとりのぞいて、achievement の部分だけを独立させた自動詞を派生することは、一

般に不可能である。(21a), (22a), (23a) の非文法性はこのことを示す。

ところがこれらの文に「en + 時間」という前置詞句を付加すると、事情はかわってくる。この前置詞句は、動詞の表わす「出来事(event)」が到達する「最終状態」に、注意をひきつける効果をもつものである。この前置詞句を付加することにより、activity が背景化し、「最終状態への移行」という achievement の意味が前面に出てくるのである。

この「最終状態への移行」というのは、3節でみたように、プロトタイプの中立的代名動詞の特性のひとつである。この面が強調されるため、(21b), (22b), (23b) における代名動詞は、意味構造が中立的代名動詞に近くなる。ただ、中立的代名動詞のもうひとつの特性である「自発的」という意味特性はこれらの代名動詞はもっていない。このため容認可能性は「?」または「?*」であり、「可」とはならないのである⁶⁾。

6. 日本語の自発表現

(28)–(30) のような文にみられる助動詞「れる・られる」は自発の意味を表わすといわれる。

(28) 故郷のことが偲ばれる。

(29) あの日のことが悔やまれる。

(30) 彼の指摘は的を得ているように思われる。

また形態的には異なるが、「見える」「聞こえる」などの形も自発の意味を表わすものとして、しばしば上記の「れる・られる」を伴う形とともに論じられる。

寺村(1982)は「自発態」という独立したヴォイスを設けているが、上記の二つのタイプに加えて、一般には自動詞とみなされる「割れる」「折れる」「とれる」なども自発態とみなしている。

本稿においては、いずれも「ある事態・現象が自然に起きる」という意味を持つこれら三つの動詞形態を、それぞれ「思ワレル型」「見エル型」「割レル型」と呼び、形態、意味の両面から分析する。

6.1. 「割レル型」

このタイプの例は「割れる」「折れる」「焼ける」などである。

このタイプは、形態的には寺村(1982)が指摘するように、対応する他動詞の語幹に‘-e(-ru)’という形態素が付いたものである。つまり自他の対をなす動詞のうちでも、他動詞の方が形態的により基本的なものであり、自動詞はそれから派生されたものと考えられるタイプである。

意味的には「割レル型」は、対応する他動詞との間にいわゆる“causative-inchoative”の関係をもつものであるといえる。「V(-ru)→V-e(-ru)」という操作は、“Inchoativization”のプロセスであるといえることができる。そしてこのプロセスはかなりの生産性をもっているように思われる。この点においてフランス語における「他動詞→中立的代名動詞」の派生過程に類似している。

6.2. 「思ワレル型」

「思われる」に代表されるこのタイプの例としては、「思ばれる」「悔やまれる」「惜しまれる」「思い出される」などがあげられる。

「思ワレル型」は形態的には受け身と同じ形をとる。「五段活用の他動詞の語幹+ -are(-ru)」という形が最も多いが、「感じられる」「認められる」などは「上一段・下一段活用の他動詞の語幹+ -rare(-ru)」の例である。また「期待される」など「～する」という形の複合動詞を基とした、サ行変格活用型のものもある。意味的にはこのタイプの自発形は、思考・感情を表わす動詞に限られる、という特徴がある。

問題はこの「思ワレル型」と「割レル型」との関係をどうとらえるかである。日本語研究においては、学校文法も含めて、「割レル型」は「自動詞」のひとつの型として分類し、「思われる」に代表される自発形とは区別することが多いようである。森山(1988)もこの立場をとる。これに対して寺村(1982)は「思ワレル型」、「割レル型」の二つをともに「自発態」とみなす。

本稿では「思ワレル型」と「割レル型」の共通点と相違点を明らかにしてみたい。まず共通点であるが、この二つはともに他動詞を基として派生された、自然発生的な意味をもつ形である、ということが出来る。相違点としてまず指摘できるのは形態的なレベルのものである。「思ワレル型」は「受け身形」と同じ形をとるのに対して、「割レル型」は「語幹+*-e(ru)*」という形をとる、という明らかな相違がみられる。

意味的なレベルにおいては次のような相違が指摘できる。6.1.節でみたように、「割る－割れる」「折る－折れる」など、「割レル型」の「他動詞－自動詞」の間には“*causative-inchoative*”の関係がみとめられる。これに対して「思ワレル型」の自発形を許容する動詞は、これとは全く異なる意味構造をもっている。これらはいずれも思考や感情という *mental activity* を表わす動詞である。これらの動詞の概念から、他動詞形の主語にあたる人物を取り除くことはできない。「悔やむ人」なくして「悔やまれる」という事態は成立し得ないのである。

「思ワレル型」と「割レル型」及び「見エル型」の間には、この他にも興味深い相違が存在する。この点に関しては、「見エル型」も考慮にいれながら次の6.3.節および7節において論じたい。

6.3. 「見エル型」

「見える」「聞こえる」「売れる」「知れる」を、「見エル型」と呼ぶことにする。形態的には、「見エル型」は「思ワレル型」とは異なる特徴をもっている。「売れる」「知れる」に関していえば、「割レル型」と同形である。この形は「書ける」「読める」などの可能形とも同形であるといえる。「見える」「聞こえる」は、上代語の助動詞「ゆ」を伴う形である「見ゆ」「聞こゆ」が化石的に残ったものである。ただ現代語において“*-eru*”という形態素をもっていることを考えれば、少なくとも表面上は「割レル型」に近いということができる。

意味的な面を考えると、これらの形はいずれも自然発生的な意味合いを

もっているが、対応する他動詞の主語にあたる人物の存在が必ず想定されている、という特徴を有するものであるということが出来る。「見る人」「売る人」の存在なくして、「見える」「売れる」という事態が成立することはありえない。この点に関しては、「見エル型」は「思ワレル型」に近く、「割レル型」とは異なる。

しかしながら、意味的な面をより深く考察してみると、「思ワレル型」と「見エル型」では「自然発生的」ということの意味合いに、かなりの違いがあるように思われる。まず「知覚動詞」の「見える」「聞こえる」から検討してみよう。

本居春庭は『詞通路』(1828)において動詞を6つのタイプに分類しているが、これによると「おもはるる」「いとはるる」などの「思ワレル型」の自発形は、第五段「おのつから然せらるる」として分類されている。これに対して「見ゆる」「きこゆる」は第一段「おのつから然る、みつから然する」として分類されている。そして第五段には「見らるる」「きかるる」という形が入れられているのである。春庭の第一段は、今日でいう非対格動詞と非能格動詞の両方を含むものであり、段として分けることこそしていないが、「おのつから／みつから」という表現でその相違を的確にとらえた興味深いものである。「見ゆる」「きこゆる」は、「き(切)るる」「を(折)るる」などとともに「おのつから然る」動詞として、第一段に含められているのである。

「見える」の意味は、「見ようとしなくても自然に見てしまう、見る気になる、見ずにはいられない」というものではない。「聞こえる」に関しても同様である。そのような意味にあたるのは、春庭が第五段に入れている「見らるる」「聞かるる」という形である。「見える」「聞こえる」においては、「知覚者」の「出来事(event)」に対するかかわり方は、さらに消極的、受動的である。ただ目をあけているだけで、映像は自然に目にとびこんでくるし、意図的に耳をふさぐことでもしない限り、音声も自然に耳に入ってくる。知覚動詞の場合には「人間」と「出来事」のこのようなか

かわり方が可能なのである。「知覚者」の意図とは一切関わりなく「出来事」が成立する、ということが起こり得る。思考の動詞の場合にはそうはいかない。

意味的にいって、「思ワレル型」の自発形は、「見える」「聞こえる」に比べて、他動性が高いということが出来る。このことは、古い時代には思考や感情を表わす動詞ばかりではなく、主語として「動作主(agent)」をとる他動詞や自動詞も「思ワレル型」の自発形を形成していたことからうかがえる。『詞通路』にも「にけらるる」「すすまるる」「しりぞかるる」などの例がみられるし、(31)は森山(1988)が収録している『更級日記』からの例である。

(31) ともかくもいふべき方も覚えぬまに…とや書かれにけむ

(森山 1988)

7. 語彙的アスペクト

語彙的アスペクトの観点からいっても、「思ワレル型」と「割レル型」及び「見エル型」との間には興味深い相違がある。森山(1988:130)は「思ワレル型」の自発形をとり得る動詞を17ほど列挙しているが、「思う」「望む」「嘆く」「期待する」「急ぐ」など、これらのほとんどが Vendler (1957)/ Van Valin (1990) のいう state または activity である。わずかに「認める」「納得する」「思い出す」の3例が achievement であるにすぎない。一方、他動詞から「割レル型」を派生する過程は、“Inchoativization”であるということを、5.1.節において指摘した。したがって「割レル型」に対応する他動詞は accomplishment である。

「割レル型」に対応する他動詞は、「最終状態への移行」の概念を含む、完了的な性格のものである。これらの他動詞から“Inchoativization”の操作をうけて派生される「割レル型」は、この「移行」が「自然発生的」に起こるものとして記述するものである。

「思ワレル型」に対応する他動詞の大部分のものは、これとは全く異な

る性質をもつものである。これらは「最終状態」の概念は含まない。これらの動詞が記述する内容は、時間に対して均質 (homogeneous) である。

「見エル型」の場合はどうか。「見える」「聞こえる」は achievement である。そして「自発的」という意味特性も兼ね備えることから、「割れる」「折れる」などの inchoative predicate に非常に近い意味的特性を持つものであるといえる。つまり「見える」「聞こえる」は、「割レル型」の「拡大」としてとらえることが可能なのである。この点において日本語の「見える」「聞こえる」は、4.1.節でみたフランス語の知覚動詞の代名動詞、*se voir, s'entendre* と類似したステイタスにあるものといえる。

以上の考察をまとめると、「割レル型」と「見エル型」は連続線上にあるものであると考えられるのに対して、「思ワレル型」はかなり異なる特性をもつものであり、一線を画すべきものであるように思われる。

8. 「売れる」, 「知れる」

「売れる」「知れる」という、「見エル型」の他の例について考察してみたい。「売れる」は対照言語学的な見地からも興味深い例である。

(32) *Ce livre se vend bien.* (この本はよく売れる)

という文にみられる *se vendre* は、フランス語の中動的代名動詞の代表のように思われているものである。ところがこの *se vendre* にはいわゆる「アスペクト制約違反」(2節参照)といわれる例が多く、そのいずれもが容認可能性が高い。

(33) *Le dernière exemplaire de ce livre s'est vendu il y a une heure.*
(Pinchon 1986)

(34) *Votre tableau s'est vendu hier soir.* (Zribi-Hertz 1982)

se vendre に関しては、春木 (1994) が興味深い分析を行なっている。「本が売れる」という「現象」は、たたきうりのようなごく特殊な場合を除いて、「売手」の積極的な行為によって引き起こされるものではない。店にならべておけば客が買っていく、というような、なかば自然発生的な

性質のものなのである。このような点を考えれば、*se vendre* は中動的代名動詞ではなく、むしろ中立的代名動詞である、というのである（春木 1994：41-43）。

vendre という他動詞は「最終状態」を含意するものである。ただ、3節でみたように、「最終状態」を含意するということが、“Inchoativization”の必要条件ではあるが十分条件ではない。自然発生的な生起が可能である、というもうひとつの条件をみたさねばならない。*assassiner* のような他動詞が中立的代名動詞を形成し得ないという事実はこのことを示している。*vendre* 「売る」という概念は「売人」なくして成立し得るものではない。しかしながら春木（1994）が指摘するように、この動詞はその意味的特殊性から、自然発生的な意味合いを持つことが可能なのである。こうして中立的代名動詞成立の二つの条件をみたすことになり、(33)、(34)のような文が許容されることになる。

日本語の「売れる」に関しても、同様の説明が可能である。「最終状態」の含意と、「自発的」という意味特性をもつという、二つの条件をみたすため、*inchoative predicate* に準ずるものとして形態素“-e-(ru)”をとるのである。

「知れる」はどうか。

(35) 恋すてふわが名はまだきたちにけり人しれずこそ思ひそめしか
 (拾遺和歌集)

という歌にもみられるこの語は、かなり早い時期から四段他動詞に対応する下二段自動詞として存在していた。現代語では下一段化して「知れる」という形（終止形）になっている。

「知れる」に対応する他動詞である「知る」は、*achievement* である。「知れる」の場合も、「見エル型」の他の例と同様、「最終状態」の含意と「自発性」という、二つの意味的特性をそなえているために、*inchoative predicate* に準ずるステイタスをもつことになるものと思われる。4.2.節でみた、フランス語の *se savoir* を複合過去においた (19) が全く問題な

く受けいられる文であるということを考えあわせても、興味深い例である。

9. 結 語

以上、フランス語の代名動詞と日本語の自発表現について、両者の比較を交えながら分析してきた。フランス語の中立的代名動詞と日本語の「割レル型」の自発表現は、ともに対応する他動詞から派生された *inchoative predicate* と考えることができる。そして従来「中動的代名動詞のアスペクト制約違反」の例とみなされてきた *se voir* 等と、「見エル型」の自発表現は、それぞれ中立的代名動詞、「割レル型」の拡大例であると考えることができる。特に *achievement* 型の拡大中立的代名動詞と、「見エル型」の自発表現は類似性が強い。拡大中立的代名動詞の中でも、許容度の高い *se voir, s'entendre, se vendre, se savoir* の四つが、いずれも日本語の「見エル型」の自発表現に対応する語を持つのも、この現象の普遍的な側面を示唆しているようで、興味深い。

一方、日本語の自発表現のもうひとつのタイプである「思ワレル型」は、これらとはかなり異なる性質をもつものであり、一線を画すべきものであるということができる。

[注]

インフォーマントは Claude LEVI ALVARES 氏、Catherine VANSINTEJAN DIOT 氏、André KÖENIGUER 氏、Jean-Christian BOUVIER 氏にお願いした。心から御礼申し上げます。

- 1) この記述方法は、Grimshaw (1982) に従うものである。
- 2) この問題は、理論的には「非対格／非能格」の対立に関係することともいえる。この点に関しては、井口 (1995) を参照されたい。
- 3) “*inchoative verb* (起動動詞)” というとき、ふつう「動作・状態の開始点に注意を向ける動詞」を指すものであるが、本稿でいう “*inchoative predicate*” はこのような一般的な意味のものではない。“*causative*

predicate”との間に、(5) で表わされるような論理的関係を持つ predicate を指すものである。

- 4) 春木 (1987) も (8) のような例は中立的代名動詞である、としている。
- 5) Wagner (1977) は筆者は未見。この例文は Fagan (1992) の引用による。
- 6) (20) を「可」とするのは Zribi-Hertz の判断である。筆者が尋ねた 3 人のインフォーマントは、いずれもこの文は「不可」とした。このことは、この文の容認可能性に関しては、インフォーマントの間でかなり違いがあることを示すものである。

[参考文献]

- Boons, J.-P., Guillet, A., Leclère, C. (1976): *La structure des phrases simples en français: constructions intransitives*, Droz, Genève.
- Dowty, D. (1979): *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- Fagan, S. M. B. (1992): *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fellbaum, C. and A. Zribi-Hertz (1989): *The Middle Construction in French and English: A comparative Study of its Syntax and Semantics*, Indiana University Linguistics Club Publications, Bloomington, Indiana.
- Grimshaw, J. (1982): “On the Lexical Representation of Romance Reflexive Clitics”, in J. Bresnan (ed), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, MIT Press, MA.
- 春木仁孝 (1987): 「フランス語の中立的代名動詞と非人称受身」, 『言語文化研究』13号, 大阪大学言語文化部.
- 春木仁孝 (1994): 「中立的代名動詞と受動的代名動詞」, 『日仏語対照研究論集』, 日仏語対照研究会.

- 井口容子 (1995): 「フランス語の再帰／非再帰形自動詞と非対格性」, 『言語文化研究』21号, 広島大学総合科学部.
- 森山卓郎 (1988): 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院.
- 本居春庭 (1828): 『詞通路』(『詞の通路・上』(島田昌彦解説), 勉誠社, 1977).
- Pinchon (1986): *Morphosyntaxe du français*, Hachette, Paris.
- Ruwet, N. (1972): *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Seuil, Paris.
- Shibatani, M. (1985): "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis", *Language* 61: 821-848.
- 寺村秀夫 (1982): 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版.
- 東郷雄二 (1994): 「受動態と非人称の transitivity system—日仏対照研究へ向けて—」, 『日仏語対照研究論集』, 日仏語対照研究会.
- Van Valin, R. D. (1990): "Semantic Parameters of Split Intransitivity", *Language* 66: 221-260.
- Vendler, Z. (1957): "Verbs and Times", *The Philosophical Review* 66: 143-160.
- Wagner, F. (1977): *Untersuchungen zu Reflexivkonstruktionen im Deutschen*, Peter Lang, Frankfurt am Main.
- Zribi-Hertz, A. (1982): "La construction "se-moyen" du français et son statut dans le triangle moyen-passif-réfléchi", *Linguisticae Investigationes* 6-2: 345-401.

Les constructions réflexives en français et les expressions spontanées en japonais

Yoko IGUCHI

Dans cette étude nous analysons certaines constructions réflexives en français et les constructions qui expriment la nuance de "spontanéité" en japonais. À travers ces analyses, nous relevons le parallélisme qui se trouve entre ces deux constructions.

Les expressions spontanées en japonais se divisent en trois classes. La première classe comprend des formes verbales comme *war-e-ru* 'se casser', *yak-e-ru* 'brûler' etc. Ces formes peuvent être considérées comme des prédicats "inchoatifs" dérivés des prédicats "causatifs" correspondants. En ce sens-là, elles sont de la même nature que les verbes pronominaux neutres en français comme *se briser*, *s'allumer* etc.

La deuxième classe est constituée des formes *mie-ru*, *kikoe-ru*, *ur-e-ru* et *sir-e-ru*, qui ont le statut très proches des formes françaises *se voir*, *s'entendre*, *se vendre* et *se savoir*, respectivement. Ces formes ne sont pas des prédicats inchoatifs, mais elles partagent deux traits sémantiques cruciaux avec les prédicats inchoatifs: la transition vers un état final et la spontanéité.

La troisième classe des expressions spontanées du japonais est de nature très différente des deux autres classes. Elle comprend les formes verbales comme *omow-are-ru* 'sembler' et *kuyam-are-ru* 'regretter; ne pouvoir pas s'empêcher de regretter'. Les verbes transitifs correspondant à ces formes sont des verbes décrivant des activités mentales et, du point de vue aspectuel, la plupart de ces verbes appartiennent à la classe de l'"activité (activity)" ou de l'"état (state)" d'après le classement de Vendler (1957).